

出雲ピクチャーズ製作第1弾「渾身」



山陰から世界へ…出雲ピクチャーズ①

錦織監督

映画の現場から



映画「ローマの休日」の主演、オードリ・ヘップバーンはオーディションで選ばれ、華々しいデビューを果たした。「スター・ウォーズ」でアウトローの船長役を好演したハリソン・フォードもオーディションで選ばれ、世界に鮮烈な印象を与えた。2人のその後の活躍は言うまでもない。

現在でも多くの映画で“才能”を発掘すべくオーディションが行われ、主演デビューを果たしている新人がいる。もちろん、スターを主役に据えたエンターテインメントな作品を否定しているわけではないが、もの作りの現場としては、日本の映画製作の現場は世界の常識とはかけ離れている感は否めない。

あまり知られていないが、「スター・ウォーズ」はルーカスが作った自主映画である。最初メジャーな映画会社やメディアは全く参加していなかった。公開前、こんな企画を誰が見るのかと映画界の評判は著しく悪かったが、前評判を覆して世界的なヒットをしたのだ。現在でも製作態勢は変わらず自主映画のままだ。

メジャー映画会社が製作チヨイスしない

企画でも製作できる選択肢があるのは日本との大きな違いだと思う。アイデアと熱意で突破し、有名なスター俳優を尻目に無名でも才能ある演技手を探し出し気を吐いている。とにかく決まった作り方などない、と言わんばかりに作り手、演技手とともに“才能”が出てくる。海外の製作者（出資者）はその挑戦の中にこそ大きなチャンスがある、と思っている者も多いのだ。

日本映画の場合もニューフェースと呼ばれたスター候補がオーディションで選ばれ、主演デビューを飾っていた時代もあり、多種多様な企画が生まれ製作されていた。今はメディアで知られている俳優やタレントが持ち回りで主演するケースが多く、役に合った演技者よりも、有名であることの方が優先されている場合が多い。新しい取り組みはほとんどないといっていい。

映画会社が東京に一極集中しているのも日本特有であり、“前例がない”システムでの企画や、大手企業（メディア）がつかない映画を製作するのは難しい。映画館で公開されない映画が年間200本以上も生まれている現実が影を落としている。

私が島根で作させていただいた映画は、県や市の助けはもちろん、地域の多くの皆さんの支援や支えがあったからこそ作り続けて来られた。欧米は国や行政が助けているケースも多く、ある意味ヨーロッパ的な製作態勢に似ているかもしれない。

それでも企画するたびに全国公開の壁をどうしたものかと思案している中、島根の映画に対する支援態勢や歴史的財産（伝統、自然環境などを評価してくれる全国のファンや応援団に集まっていた）“前例のないシステム”で映画作りをしていこう、ということになった。それが、出雲を拠点とする映画製作会社「出雲ピクチャーズ」。出雲から世界へ向けて挑戦が始まった…。（次回に続く）

●●● 31